

## 浦島太郎

昔むかし、あるところに浦島太郎という若者がいました。浦島は毎日海へ魚を捕りに行き、それを売って暮らしていました。ある日、いつものように海へ行くと、子供たちが何やら騒いでいます。覗き込むと、一匹の亀が棒でつかれ、いじめられていました。

「おいおい、亀がかわいそうじゃないか。そんなことするんじゃない。」  
浦島は子供たちを追い払い、亀を逃がしてやりました。

それからしばらく経ったある日、浦島が海で魚を捕っていると、何やら浦島を呼ぶ声が聞こえます。振り返ると、そこには助けた亀がいました。「この前は、助けてくださってありがとうございます。さあ、わたしの背中に乗ってください。竜宮城へ、連れていつてあげましょう。」浦島は「これはどうしたことだろう。」と思いましたが、亀の背中にまたがりました。亀はしぶんと潜って、すいすい海を進みました。



やがて、目の前にきらきら輝く立派なお城が見えてきました。「さあ、ここが竜宮城です。どうぞお入りください。」浦島が亀の背中を下りると、美しい乙姫さまが迎えに来てくれました。「浦島さま、ようこそいらっしゃいました。この間は亀をお助けいただきありがとうございます。大したおもてなしもできませんが、どうぞごゆっくりお過ごしくださいませ。」言われるままに席に着くと、美しい女の人が次から次へとちそうを運んできて、鯛やひらめがゆらゆらひらひら、見事な舞いを見せてくれました。「いやあ、これは楽しい、楽しいぞ。」浦島は大喜びです。

次の日も、その次の日も、乙姫さまは浦島を心ゆくまでもてなしてくれました。そうして三か月ほど経ったある日、浦島はふと地上での暮らしを思い出しました。「乙姫さま、今まで本当にありがとうございました。そろそろわたしは家へ帰ろうと思います。」「とても名残惜しいのですが、そう思われたのなら仕方ないですね。それでは、お土産にこの玉手箱を差し上げましょう。ただし、どんなことがあっても、決して開けてはいけませんよ。」  
「はい、決して開けたりしませんとも。」乙姫さまに別れを告げ、浦島は亀に乗りました。亀はすいすい上って、ついに浜辺に着きました。

浜へ上がった浦島は早速家の方へ歩きましたが、どこへ行つても懐かしい家は見つかりません。通りがかつたおばあさんに尋ねてみると、「ああ、ここに浦島という家があつたと聞いたことがあるよ。その息子は魚捕りに出たつきり、いなくなつてしまつたらしいね。まあ、大昔のことだけだね。」「えつ、大昔ですか。」竜宮城での一日は、こちらでの一年だったのです。長い年月が経っていることに気がついた浦島は、これで時間が戻らないかと玉手箱を開けてしまいました。するとびつくり、もくもくと白い煙が立ち上り、浦島は白髪のおじいさんになつてしまいましたとき。

